

インド洋世界の中のアチェ

鈴木恒之

昨年末のスマトラ島沖地震とインド洋大津波から既に1ヶ月余が過ぎた。被害が大きく、広範囲に及んだこともあり、当初の報道は量の多さに比してその内容は乏しかった。特に震源地近くのインドネシア、アチェ州については、当初ほとんど情報がなく苛々させられた。このことから、現在のアチェ州がアチェ独立運動を進める自由アチェ運動(GAM)鎮圧を名目に、一切の反政府運動の抑圧をはかる非常事態(民事戒厳令)下に置かれ、世界のメディアにほとんど開かれていなかったことを改めて痛感させられた。

その後、諸外国から軍を含む政府及び民間組織が救済活動のために入国したが、インドネシア政府、特に国軍はあまりこれを歓迎しておらず、早く出て行けと言わんばかりの対応を示してきた。援助活動に対してさえかくの通りであるから、報道への規制や妨害は言うまでもない。こうした対応は、GAM鎮圧を名目に、特に1980年代末から軍事作戦地域指定、軍事戒厳令、引き続き民事戒厳令下でインドネシア国軍によって為されたアチェ住民に対する数々の虐殺、人権無視の抑圧政策の実態が明らかにされることへの警戒からであることは確かである。また、等しく被災し、弱体化しているであろうGAM勢力を、これを機に一掃しようと図っていると見るのは、穿ちすぎであろうか。

このGAMと同様、アチェの分離独立を求めた運動に1950年代のダルル・イスラム運動がある。また、ポスト・スハルト期の国民投票要求を中心とする運動も独立要求を内包していたと見てよい。これらの運動はそれぞれ発生を促した時代状況はむろんのこと、形態や内容も異にするが、それらに通底する要素が見られるのではないかと私は考えている。それは何か。私は現在それをズバリと一言で表現できずにおり、ここではただ漠然と、アチェが過去において造り上げ、持続してきたトータルな歴史である、というように許して頂きたいと思っている。

この度の「インド洋大津波」は図らずもインド洋がこれに沿う地域を結びつける存在であることを改めて実感させることになった。インド洋圏を一体的な世界として見る見方は別に新しいことではなく、その一体的な世界の全体史を構築しようとする試みも既に幾人もの歴史家によって為され、注目すべき成果も生んできている。言うまでもなく、アチェはこのインド洋世界の東端に位置し、マレー海域世界への入り口でもあった。そうした位置にあってアチェが主にどの方向を向いて歴史を営んできたかを簡単に振り返ってみたい。

アチェに関わる歴史がある程度明らかになるのは、後にアチェ王国に統合される港市国家サムドラ・パサー王国からである。この王国では13世紀末、イスラーム化が進むが、それは来航したベンガル商

人らの影響によっており、住民も多くはベンガル系であるとされている。また、商人は上記以外、アラブ、ペルシア、グジャラート、カリंगा、タイ、ケダーから来航するとされている。15 世紀にはこの地方にインド系の胡椒の栽培も導入され、上記へ輸出された。16 世紀にクタラジャ(現バンダ・アチェ)を本拠に港市国として発展するアチェ王国は、17 世紀前半マレー半島やスマトラ西海岸へ勢力を拡大しただけでなく、パセー同様インド、西アジア方面との絆を強くした。17 世紀後半以降交易の縮少はあっても、この絆、特にインドとのそれは保持された。このインドを主とするインド洋を経由する西方との絆は、単なる物の交流に止まることなく、人と文化(精神的・物質的)の移動を伴った。まさに、今なおアチェの政治的、社会的、文化的特質を成す諸要素の形成は、こうしたインド洋世界との交流の中で為されてきたと考えられる。

アチェ人が歴史的に向けてきた視線、それにより築いてきた絆は西方インド洋世界にあり、東方バタヴィアにはなかった。彼らはアチェ戦争の結果により、バタヴィアに目を向けることを余儀なくされた。その強制的な視線の転換からまだ 1 世紀を経たに過ぎない。アチェ戦争の指導者の 1 人、テウンク・クタランは、アチェ人はオランダの奸計に欺かれ従属させられたジャワ人とは異なることを自負し、戦いを鼓舞した。共和国の中央政府がジャカルタ(バタヴィア)に置かれており、それがジャワ人に率いられていると見なせるとしたなら、何かの不满をアチェ人が抱いた場合、それらがアチェ人の多くがジャカルタに背を向けようとする動きに容易に繋がるのではないかと私は考えているのである¹。

この考えは未だ熟していない。多くの忌憚のない批判を期待している。

¹ この内容は、Lombard, Denys; “The Indian World as seen from Aceh in the Seventeenth Century” (Om Prakash, Denys Lombard ed., Commerce and Culture in the Bay of Bengal, 1500-1800, Manohar, 1999, pp.183-196)より、示唆を得ている。

GAM などアチェの反政府運動については、西芳実「アチェ紛争——ポスト・スハルト体制下の分離主義的運動の発展」(『日本比較政治学会年報第 3 号:民族共存の条件』103-122 頁)を参照のこと。